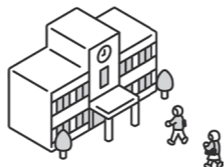


## 〈今治市PTA連合会〉ってどんなことをしてるの？



今治市PTA連合会の活動に関しては、広報紙やホームページ等で情報を発信していますが、残念ながら保護者からは「何をしているのかよく分からない」という声も聞かれます。

PTA連合会では、研修会や球技大会などの企画を通して単位PTA（各校のPTA）の垣根を超えた交流や、課題解決に向けた話し合いの場を作ることで、今治市全体の教育の場をみんなで作り上げていく目的で活動しています。

また、連合会が企画する自主イベント以外にも、様々な協議会や審議会などに出席するのも重要な仕事の一つです。教育行政や地域活動を行う際に、保護者を代表して質問や意見交換をし、その内容を単位PTAに持ち帰り、会員に伝えるという役割を担っています。出席する会議は、直接学校運営に関係する「学校給食」「校区再編」「人権教育」などから、地域の子どもの居場所に関する「図書館」「青少年センター」など、生活の中で子どもの安全を守るための「防災」「交通安全」「薬物乱用防止」など、多岐の内容にわたります。市長との意見交換会なども行っており、保護者の意見を直接伝える貴重な機会となっています。

日頃から子どもたちを取り巻く環境について「もっとこうだったらいいのに」と思うことはたくさんあると思いますが、どこに言えばいいの？と思った時は、各校にはPTA連合会の役員になっているPTA会員がいますので、その方に言っていただくか、PTA連合会事務局(教育委員会事務局生涯学習課内)にご意見をお寄せください。保護者からの意見や要望をPTA連合会本部役員会で共有し、各会議等で委員として貴重な意見を反映させていきたいと思ひます。



今治市PTA連合会の活動はこちら  
<http://imabaricity-pta.jp>



### 会長挨拶 長尾正人 (ナガオマサヒト)

〈今回の会長挨拶は「失敗から学んだこと」というテーマで書いています。「失敗が許されない時代」と言われる現代ですが、失敗から学んでこそその豊かな人生。失敗しながら学び成長する、子どもたちへのメッセージでもあります。〉

日頃より今治市PTA連合会の活動にご理解とご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

また、各単位PTAでの様々な活動に対しまして敬意を表します。

PTA活動は、子どもたちのためであることはもちろんですが、私たち保護者の学びの場でもあると思ひます。そして学びとは、成功経験の中にのみあるものではなく、失敗の中から学ぶこと、否、失敗の中からはか学ぶことができなことも多々あります。

我が家は父親の代より、有機農業をしていて、私はそんな農業が好きではなかったことから、県外で建設会社に勤めていました。現在は、有機農業の魅力、サラリーマン生活とは違うその生活スタイルに心地よさを感じ、Uターン就農して20年になります。とは言え、農業の勉強など一切してきてなく、ましてや有機農業となると教わる先生もいません。幸いにも私の場合は、父親が先生として身近にいたため恵まれていました。農業は自然相手の仕事であるし、栽培する作物は基本的には、1年に1回しか作れません。私も、有機農業を始めて10年くらい経ち慣れてきた頃に、病気により玉ねぎがほぼ全滅したことがありました。経済的な損失もそうですが、それよりもある意味、得意げになっていた自信を打ち砕かれたような気がしてショックでした。しかし落ち込んでばかりで原因、対策を考えなければ来年また同じ失敗をします。この時は、基本（農業の基本は土づくり）を疎かにした結果であったと考察したのですが、改めて基本の大切さを実感させられた出来事でした。これ以降、うまくいかなかったり迷ったりした時には基本に立ち返るようにしています。まわり道のようにも結局は根本解決に繋がっていくことを学びました。

PTA活動についても同様のことが言えますが、毎年続く活動をより良いものにするために常に考え、話し合いを尽くすことが大事なのであろうと思ひます。その中で、迷った時には基本（PTAの本質）に立ち返ることも一つの大切なことではないでしょうか。

子どもたちだけでなく、私たち大人もウェルビーイング（持続的な幸福）な状態となるよう、また向上していくことを目指して、共に考え行動していきましょう！



## 今治市の教育現場の課題と展望

近年の急激な少子化に伴い、従来の教育システムをただ継続することは困難になってきています。学校は単に教育の場としてだけでなく、子どもたちが健やかに育つ生活の場でもあり、さらには地域コミュニティの中核を担う大切な施設です。その継続には様々な課題がありますが、その一つ一つの解決を図る際にまず私たちが現状を知り、課題を共有し、その解決に向けて積極的に議論し、声を上げていく必要があります。今号では、その中のいくつかの課題にフォーカスし、様々な課題の先にある「誰ひとり取り残さない教育」について考えてみようと思ひます。



### ① 通学インフラ

学校再編により、通学時間が長くなることや、徒歩や自転車通学の安全対策に配慮が必要な地域が発生するなど、子どもたちの安心安全な通学をどう確保するかが課題となっています。

文科省の指針では理想的な通学距離は小学校は4キロ以内、中学校は6キロ以内とされていますが、単に距離だけでは適正化を図ることは困難であり、通学路の安全性やその地域に適した通学路の選定をきめ細やかに行う必要があります。

市内の小中学校の通学距離と時間を調べたところ、鴨部小学校の徒歩50分、大三島中学校のバスで53分、菊間小学校ではタクシー利用が4人おり、山間部や島嶼部の通学には、公共インフラを含めて様々な通学手段を柔軟に活用していく必要があります。また、市街地の通学路には車の通行量の多い道もあり、見通しの悪さや道幅などの交通状況によって注意が必要な場所もあります。

このように全ての地域において、自然環境、児童生徒の特性、障がい、家庭環境なども含めた条件に合わせて総合的で弾力的な判断が求められ、地域や保護者の理解や協力が不可欠となっています。青パト、通学安全委員会など地域のボランティアや民間事業者などの協力も得ながら、地域全体で子どもたちの安全を守っていく見守り体制が必要です。



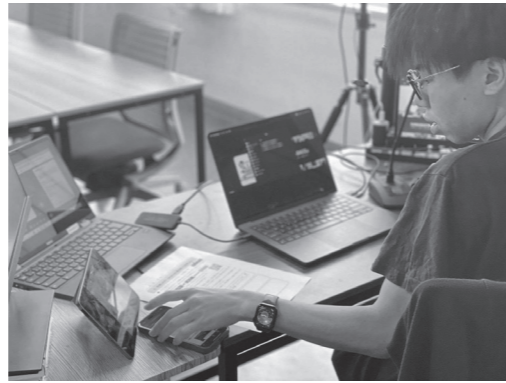
校区が広くなることで、地域の子どもの見守り活動が手薄になることがあってはなりません。通学時だけでなく、日常の挨拶や地域行事などを通じて、地域の方々と触れ合い、みんなで子どもの安全を守っていくという意識を高めることで、平時だけでなく災害時の危機管理にも繋がっていきます。

## ②ICT教育 「中学生プログラミング教室開講！」

今治市教育委員会では、市内全中学校の3年生を対象に、プログラミングのスキル向上を目的とした「中学生プログラミング授業」を実践しました。本講座は、双方向通信による学習の促進と、島嶼部の生徒たちがネットを通じて陸地部の仲間とつながりながら学べる機会を提供することも目的としています。

講師は、民間のプログラミングスクール「SUNABACO今治」に依頼、各校の技術・家庭科（技術分野）指導教員のスキル向上も目指しています。SUNABACO今治は実践的な指導で知られ、今回の授業では、Microsoft Make Codeを用いたゲームコーディングに取り組みました。各グループが自由にゲームの内容やルールを設定し、協力しながら作品を完成させることで、プログラミングの基礎から創造力を養うことを目的としています。授業は、講師が実践を交えて進行。完成したゲームはリンクで共有され、講師が代表して実践しながらコードを解説。講師と各校の先生が共有ファイルで進捗を確認し合うなど、サポート体制を整えていました。生徒たちは、自分たちの考えをコードに反映させる楽しさを体験しました。

SUNABACO今治の指導方針は「エラー&ラーン（失敗を通じて学ぶ）」を大切にしており、生徒が自ら考え探究する力を育むことを重視しています。「教わることがゴールではなくスタート」という理念のもと、生徒たちは学びの一步を踏み出しました。



2021年に始まったGIGAスクール構想によって、全国のほぼ100%の学校で一人一台端末が普及したと言われています。新型コロナウイルスの蔓延による突然の休校なども後押しし、今では子どもたちが自在にタブレットを操作して宿題をする姿も見慣れた光景となりました。テクノロジーの進歩は目覚ましく、学校によってその活用に差が生まれてしまうことがないよう、教員は日々スキルアップに努めています。

## ③地域コミュニティ 「地域でつくる学びと成長の機会創出」

これまで多様な学びの場として、通常学級、通級による指導、特別支援学級や特別支援学校などの整備が行われてきました。しかしそのような学校内での支援だけで包括しきれない、学校そのものに通学をしない「不登校」と呼ばれる子どもたちも全国的に増加しています。今治市でもその例外ではなく、十分な受け皿が無いままに通学ができず、苦しんでいる本人はもちろん、サポートする保護者の負担も大きくなっています。ある日突然子どもが学校に行きたくないと言い出し、叱ったり無理やり連れて行ったりしても事態が改善せず、保護者世代に見られなかった傾向に対して理解も進まず、本人も保護者も疲弊して孤立してしまうという悪循環が様々なところで起こっています。

一口に「不登校」と言っても、そこには人間関係の悩みや、家庭の問題、児童生徒の特性などが複雑に絡み合っています。学校との連携はもちろん、スクールカウンセラーや、当事者の会、地域の居場所などで気軽に相談の場をつくり、親子ともに前向きになれる方向性を探っていく必要があります。

市内には、行政が運営する適応指導教室や、NPOが運営するフリースクールや相談機関もあります。

不登校だけでなく、子育てで悩んだらどんな事でも気軽に相談して、思い詰めたり孤立したりしないような雰囲気作りが大切ですね。

### 子どもの居場所事例「みんなのアトリエ」(今治市古国分3丁目2-54)

子どもたちが「学校に行けない」ではなく、「自由に選択する」ための場所を提供する、古国分にある「みんなのアトリエ」取材してきました。アトリエ代表を務める正岡ともえさんの居場所づくりのモットーは、①自分の命を守る②笑顔を守る③自立を目指す④尊重し合う空間を作る、という4つ。取材をしている間も、たくさんの子供たち、大人たち、そして猫たちが自由に行き交い、お互いを尊重しながら過ごしている姿が印象的で、こんな居場所がもっと増えると良いなと思いました。



## ④学校の合併 「学校の統廃合について」

法令上では、小学校と中学校の望ましい学級数は12学級から18学級とされており、1学年あたり小学校の場合は2〜3クラス、中学校の場合は4〜6クラスが望ましいとされています。しかし、都市部の一部を除いて、今後の少子化を考慮すると、全国的にこの規模を維持するのは難しいと予測されます。今治市内では、特に島嶼部や山間部で少子化が進み、すでに複式学級となる学年が増えてきています。現在、5校に複式学級が発生しており、今後5年間の児童生徒数を予測すると、複式学級の数は倍増することが予想されます。

教育大綱推進課が実施したアンケートでは、保護者と教職員の双方が3クラス程度が望ましいと考えているという結果が得られました。しかし、島嶼部では2クラス程度を希望する保護者が多く、現状の1クラスよりは2クラスの方が良いと感じる一方で、クラス数が少ないことによるメリットも感じていると考えられます。実際に、小規模校での教職員経験がある方や保護者の中には、小規模校のメリットを感じている人も一定数おり、学校規模だけでなく、子どもたちが地域で自分らしく成長できる環境全体を評価する視点も必要です。また、子どもの個性によって、学校規模に適性がある場合もあります。大規模校で馴染めなかった子どもが小規模校で生き生きと学び、逆に小規模校の人間関係に悩む子どもがクラス替えのある学校でのびのびと学べることもあります。そのような個別の事例に柔軟に対応しつつ、学校規模に応じた効果を地域全体で最大化していく必要があります。

統廃合に伴い、学校をより地域に開かれた複合的な施設として機能させることも一つのアイデアです。まちづくりを考える際に教育機関と運動・連携することで総合学習やキャリア教育へとつなげるという事例も各地に見られるようになりました。地域住民や地元企業・団体などが複合施設に参画することで、これからの時代を生き抜くための社会性を学ぶ場としても機能するのではないのでしょうか。単に学校規模を大きくするだけでなく、地域全体にとってのメリットを考慮することでより良い統合の形を模索していきたいですね。



全国では毎年約450校程度が廃校となっており、地域に学校がなくなることによるデメリットを緩和しつつ、廃校後の旧校舎を地域コミュニティのための施設として活用できるよう、財務処分手続きに柔軟性を持たせる政策も進められています。

## ⑤小規模校 「岡村小学校の事例から」(岡村小・関前中PTA 吉野秀雄)

関前諸島の岡村島にある岡村小学校は、全校児童3名の小規模校です。複式学級が採用されており、各自が目標に向かって日々学習に取り組んでいます。校内には関前中学校が併設されており、体育の授業や一部の学校行事は、小・中学生合同で行われます。

今回は、私が考える小規模校のメリット・デメリットについて紹介させていただきます。メリットは、子ども一人一人に合わせた授業が受けられることです。先生方とマンツーマンの授業で、個人の学習状況に合わせたきめ細やかな指導を受けることができます。また、授業では自分の意見や感想発表の場も多く、自ら考え表現する力も育まれます。さらに、島の学校ならではの魅力の一つに、地域住民との交流がさかんなことが挙げられます。海岸や地域の清掃活動をはじめ、秋祭りや文化祭など、子どもたちは島の方々とふれあいながら様々な行事に参加しています。このような日々の活動を通して、子どもたちは地域に貢献することの重要性を楽しく学んでいます。

デメリットは同世代の友だちとの交流が少ないことですが、学校行事の中には吹揚小学校との交流もあり、運動会や修学旅行などの行事を通じて、集団行動を学ぶことができます。また、ICT教育の一環で、上島町の魚島小・中学校とオンラインで交流し、日々の出来事を話し合ったりする機会もあります。

高齢化率70%超、人口300人余りの小さなコミュニティ全体で育てられている子ども達は、多様な経験を積み、主体的に学び考える力を養っています。今後日本は少子高齢化がさらに進み、各学校の児童数は減少傾向にあるでしょう。しかし、小規模校であるからこそ、育まれる社会性もあります。岡村小学校の現在の取組みが、これからの学校教育を考える際の糸口となれば幸いです。

